

主 題：御子による救い

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章15－23節

今日は、コロサイ書1章からメッセージをさせていただきますが、実は先月、千里礼拝でコロサイ書1章1－14節をメッセージさせていただいたので、今日はその続きということになります。今日の箇所を読む前に、パウロがコロサイのクリスチャンたちに向けてこの手紙を表した事情をお話しします。コロサイは小アジア—今のトルコですが—にあるローマ帝国の属州であるフルギヤ地方にあった町です。リュコス川の流域にはラオデキヤ、ヒエラポリス、そしてコロサイという三つの町、そして、教会がありました。ラオデキヤの教会は黙示録にも書かれているように、この当時以降、紀元60年後半頃には、この三つの教会の中では最も有力であったことが伺えます。紀元前6世紀頃から、ユダヤの捕囚が終わってユダヤ人はイスラエルへと帰還していきますが、イスラエルの地はペルシャからシリアの統治に変わり、その間にユダヤ人は地中海沿岸の様々な地域に国策によって移住させられたという事情があって、コロサイの地域にも多くのユダヤ人が移住して来ていました。

また、この土地は川の沿岸ということもあって、とても肥沃で羊がたくさん飼われていました。そのために織物業が盛んでそのことによってローマ属州としては収入が多く富んだ町でした。また、ギリシャのヘレニズム文化の影響もあって、ここではギリシャ哲学が流布しており、後に見ますが、ストア派哲学の思想によって、そして、多くのユダヤ人のユダヤ主義によって、キリスト教の教えが汚染されており、異教の教えに変質していたという事情がありました。

このような中であっても、コロサイ教会のクリスチャンたちは神によって守られて、正統的な信仰を保ち続けていることの感謝が1章の3－14節に書かれています。この感謝に続いて、今日見る箇所、15－23節では「御子キリストの働き」についてパウロは彼らに教えます。その教えによって、彼らの霊的成長がなされ信仰生活が変えられるように、そして、より力強く神に支えられるようにという願いをもってパウロはこの手紙を書いています。 今日見る箇所、1：15－23を読みます。

「：15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。：16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。：17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。：18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。：19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、：20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。：21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあつたのですが、：22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。：23 ただし、あなたがたは、しっかりと土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」

この箇所は二つの大きな部分に分けることができます。一つは「御子の卓越性」を述べているところで、15－19節です。二つ目は「御子による和解」として20－23節に述べられています。では、一つ一つのみことばを順に見ていきましょう。

1. 御子の卓越性 15－19節

1) 御子と父なる神との関係 15、19節

「：15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。」 「：19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、」とあります。

・**見えない神のかたち**：これは「見える形・像・類似物」を意味し、ギリシャ語では「エイコン」ということばで、これは現在も使うパソコンの「アイコン」の語源になっています。何か見えないものを見るかたちに表すということの意味をしています。マタイ22：20に（並行箇所マルコ12：16、ルカ20：24）「そこで彼らに言われた。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」とあります。これは、パリサイ人からローマに税金を納めることが律法に適っているのかどうかという試すための質問を受けたイエスが、彼らに答えたことばです。この「肖像」が「エイコン」ということばです。その場にはいないカイザルの概念をかたちにしたものとと言えます。

また、Ⅱコリント4：4には「その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリ

ストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」とあって、「神のかたち」が「エイコン」になっています。このように神のかたちが御子であるキリストのうちに宿っているということを、この「見えない神のかたち」ということばが表しています。イエスご自身も「…「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」(ヨハネ 14 : 9)、「わたしを見た者は、父を見た」と、自分が見えない神の具体的な現れであるということを証しています。さらに、コロサイ 3 : 10 に「新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。」と書かれていて、この「造り主のかたち」も見えない神のかたちであるキリストの像であると言えます。

・**先に生まれた方** : これは原語で「プロトコス」で「第一のもの、長子」という意味があります。70人訳聖書の引照箇所詩篇 89 : 27 が挙げられていますが、「わたしもまた、彼をわたしの長子とし、地の王たちのうちの最も高い者としよう。」とこの「長子」がヘブル語の「デホール」、ギリシャ語の「プロトトコス」になります。ここで言わんとしているのは「これは時間的にはなく、序列において第一のもの」ということです。また、「御子は…生まれた」と表現されていますが、これは決して御子は何かから生じたということではなく、「第一の序列にあるもの」という意味で「長子」ということばが使われているのです。従って、御子は被造物ではありません。このことを押えておかなければいけません。

・**満ち満ちた神の本質** : これはギリシャ語では「プレロマ」ということばで、2 : 9にも同じ表現が出て来ます。「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」と。この「神の満ち満ちたご性質」が「プレロマ」という一つのことばで表現されています。その「神のご性質」とはどのようなものなのか？続く 2 : 10 に「そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。」とあります。「すべての支配と権威のかしら」、それだけではなく、神のうちにあるすべての性質、属性がキリストのうちに同じように宿っているのです。同じコロサイ 3 : 12 をご覧ください。キリストに似るものとして変えられた私たちクリスチャンはどのような新しい人を着たのかという、その性質が書かれています。「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。」と、このような特性は神の中にある性質であり、キリストのうちにみることが出来るものです。

このような神の本質がキリストのうちに宿っている。すなわち、神と御子なるキリストはその本質において同一であるということをおぼろげに信じておかなければいけません。

2) 御子と宇宙との関係 16、17 節

御子と創造された宇宙との関係性について述べているのが 16、17 節です。「:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」、16 節では創造と御子との関係で三つの前置詞が使われています。

・**創造の媒介** : 「御子によって」という表現があります。これは「媒介を表す前置詞、ディア」ということばですが、英語では by や through などのことばです。これを適用すると「御子が父なる神の創造の代行者であった」、御子は神がこの世を造られたときその実行を担ったと、そのように捉えることができます。従って、御子が被造物なら自分で自分を造るということになって矛盾が起こります。よって、この表現からも御子は被造物ではなく、創造主であったと見る事が出来ます。

ヨハネ 8 : 58 に「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」とあります。「エゴーエイミ」=わたしはいる、神としての自存性と永遠性を証していることばです。また、黙示録 2 : 13 には「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」とあり、御子は創造の初めから終わりまで存在する方であることが分かります。この世のすべては御子によって造られたということをおぼろげに覚えておきましょう。

・**創造の源泉** : 次に見るのは「御子にあって」という前置詞です。これはギリシャ語の「エン」で英語では in ですが、関係を表す前置詞になります。in は非常に意味が多いのですが、この場合は「何かの中に何かの内包されている」という関係を表しています。同じことばが使われている箇所を挙げると、ヨハネ 1 : 4 a 「この方にいのちがあった。」で、これは「いのち」が御子の中にあるという内包関係を表しています。また、「あった」ということばは未完了過去という時制が使われていて、「この方にいのちがあった」という状態が現在も継続中であることを表しています。

このように「いのち」と御子との関係を言っていますが、同じような意味で「創造の働き」と「被造物そのもののあり様」が、受肉前の御子の本質に内包されていたという関係もこのみことばは表しています。その意味で御子は創造の源泉であるとまとめました。ここで続くみことばに被造物の分類が書か

れています。

被造物の分類

このことが書かれている理由は、先ほど言いましたギリシャ哲学の流布しているストア派の考え方、哲学的思想がコロサイの教会に入り込んでいたからです。2：8に「あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意なさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。」と書かれている通りです。この「幼稚な教え」とはギリシャ語で「ストイケイア」ということばが使われていて、一連の原理、一連のABCという考え方の基礎を意味することばです。こういう考え方の中では、被造物を誤って捉えて、私たちが礼拝すべきものとそうでないものをまぜこぜに認識しているストア派の考え方がありました。一例を挙げると、この世に存在するいろいろな天使、霊、悪霊を神からサタンに至る一連の流れの中に位置づけており、それを良い霊と悪い霊とに分類しないで、段階的にあるものだと考えていました。後に、グノーシスの考え方にもなりますが、霊なるものはすべて善なるものであって、物質的なものは悪であるという二元論にもなっていますが、ストア派がもっていた天使礼拝の考え方に対して、パウロははっきりとした警告、異論を唱える意味で、この被造物の分類をここで挙げていると考えられます。

- ・ **所在において** : 「天にあるもの、地にあるもの、」と、天（天体、宇宙）と地（海、陸、動植物、人間）、これらを分類して被造物として認識なさいということです。
- ・ **本質において** : 「見えるもの、また見えないもの、」見えるもの（物体、生物）、見えないもの（エネルギー、霊）に分けて考えられます。
- ・ **創造された世界における力** : 「王座も主権も支配も権威も、」と、これは天使の序列、階級や職能のことです。地上における、また、天上におけるいろいろな主権や王座や支配という様々な力は神が創造されたものであって、天使の階級や職能でもあるということです。王座を司る天使、主権を司る天使、支配を司る天使、権威を司る天使…が存在していたのです。エペソ1：21に「すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」とあり、創造された力の上にキリストの力は君臨するということを教えています。

ですから、パウロは、このように「創造されたもの」と「創造した方」とをはっきりと区別なさいと言います。創造されたものでも「天にあるもの、地にあるもの、」があり、本質においては「見えるもの、また見えないもの、」、霊的なもの、非物質的なものと、肉体的なもの、物質のものを二つに分類して、どちらが聖い、どちらが上だと議論することは間違っていると、パウロはこのように教えているのです。

- ・ **創造の目的** : さらに、「創造と御子との関係」の三つ目ということで、その前置詞は「御子のために」です。ギリシャ語では「アイス」、英語では for、into になります。私たちが存在している目的、Iコリント8：6に「私たちに、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」「私たちもこの神のために存在しているのです。」とある通り、すべての造られたものの存在目的は御子であると言われていました。

コロサイ1：17に「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」とありますが、この「成り立っています。」ということばの英語は「hold together」ということばが使われていて、「一つに組み合わされて成立している」という意味を持っています。一つに組み合わされるその究極のポイント、目標が「御子」だということです。従って、私たち人間の存在目的だけでなく、創造されたすべての物体や力、すべての目に見えるもの、見えないものを含めて、神がすべてのものを創造された目的にこの「御子」がある、そのことを私たちは覚えなければなりません。

3) 御子と教会との関係 18節

今見て来た「御子と創造との関係」が受肉前の御子の働きであったとするなら、受肉後の御子とこの世界との関係は「教会との関係」ということになります。ここで言う「教会」は「エクレシア」、「選出された者」という意味での教会で、私たちキリストを信じるすべてのクリスチャン全体を指しています。一つの地域にある個々の現実の教会ではありません。

- ・ **教会のかしら** : この「教会」はキリストのからだとして覚えられていて、そのかしらとして御子キリストがおられるという意味になります。Iコリント12：27には御子と教会との関係についてこのように書かれています。「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」と。私たちクリスチャンの霊的な一致、また、御子のからだとしての働き、そして、その成長における役割、それらとともに私たちの成長の源泉であり目標とするものが「かしらなるキリストである」と述べている箇所です。エペソ4：15にはこのような表現があります。「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。」、また、エペソ5：23には「なぜなら、キリストは教会のかしらであって、…」という表現があります。すなわち、教会のかしらとしての御

子キリストを教えているのです。

・初めであり : 18節にあることばで次に重要なのが「御子は初めであり、」ということばです。ギリシャ語では「アルケー」、または「アルヘー」で「最初のもの、最重要のもの」という意味があります。エペソ1:4「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と、私たちの選びにおいてもキリストは初めのものとして働かれたのです。

また、Iコリント15:20には「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」とあり、復活における初穂としてキリストはその役割を果たされたということを教えています。このように、教会にとって二つの意味で「初めであるもの」「最重要なもの」という地位を御子なるキリストは保っておられます。

このように見て来ると、御子の「被造物とは一線を画する卓越性」が明らかになって来ます。私たちはその信仰生活において、御子の卓越性を覚えて過ごす必要があります。私たちはイエスの十字架に結ばれてよかったとそれだけでは決してないのです。すばらしい御子における神の救いの計画と、御子における私たちの救いのすばらしさを覚えるときに、私たちはもっと感動や喜びをもってこの御子との交わりを楽しむべきではないでしょうか。

2. 御子による和解 19-23節

さらに、御子の働きの子として20節から「御子による和解」について話を進めていきます。

1) 和解の計画 20節

19節から「:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。…」、このように御子が創造の働きにおいて重要な役割を担ったのですが、受肉後の働きは「教会との関係」で見たように、神と私たちとの仲介者となられた、それは「和解」という働きによってであるということがここで教えられていることです。

・十字架の血によって : 神の怒りをなだめるためには「血」が流されることが必要でした。これは旧約のささげものの型の規定にもあるように、神と私たちとの間の贖いが成されるためには動物の血が流されなければなりません。神が私たちに対して怒っておられる、その怒りをなだめるためには何らかの血が流されることが必要だったのです。偽教師たちは天使を媒介とした神との和解ということをお説きしていました。しかし、霊的な存在である天使による和解では、天使は神ではないので、神の聖さを天使は十分に理解することはできないでしょう。

また、後にも出て来ますが、「十字架の血」と言いますが、肉体を持たない天使にとって血を流すことは不可能です。このことを通しても、神は偽教師たちのグノーシスの教えの間違いをコロサイのクリスチャンたちに分からせようとしていたことが読み取れます。

・御子によって : 御子による神との和解、「アポカタラゾー」ということばが使われています。これはだれか第三者の介入によって相対立する二人の関係が改善されるという意味をもった動詞です。すなわち、ここでは神と人間との敵対関係の解消、神が罪人を憎まれ、また、罪人は神に反逆するという状況の解消ということに、御子が関わっておられたということを表しています。

・万物を : これは「万物の和解」ということで、ローマ8:19-22に書かれています。「:19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。:22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」、被造物、すべての造られたものがそののろいから回復するということです。私たちの神との和解というのは、単に、私たちが神の前にどういう立場であるのかということ、それが変わるということだけではなく、万物が神の前にのろいを解消されるという意味をもっているのです。それは17節で、万物が創造された目的に沿って御子において統合されるということをお話ししましたが、創造の究極の目的は、万物がともに働いて御子の栄光を現すことです。すなわち、御子が栄光を受けられるそのときが創造の本当の意味での完成であると、そのように言えるのです。神はすべてのものをこの御子から創造において造り出し、また、世界の歴史の完成において御子との和解、万物の完成ということを計画されていたのです。

このようにパウロが、御子の和解における働きということを殊更に詳しく説明しているのは、先ほども言ったように、グノーシス派の教えを持ち込む偽教師たちが、御子ではなく天使による和解を教えたことへの反論ということが言えます。私たちはこのような間違った教えに立つのではなく、常に、神が御子による和解、御子による救いということをどのような意味で捉えておられるかということを確認して把握しながら覚えて生活する必要があります。

2) 和解の意味 21、22節

「:21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあつたのですが、:22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」とあります。

・**神を離れ** : これは「神からの疎外」です。ローマ8:8には「肉にある者は神を喜ばせることができません。」と書かれています。罪をもったままでは私たちはどんなに努力をしても神に喜ばれるものになることはできません。すなわち、神から疎外されているのです。「疎外される」とは英語で「alienate」、
「関係ないものとされる」という意味です。また、エペソ2:12には「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」と書かれています。神の約束の民であるイスラエル人ではない、また、神から救いをもたらされるクリスチャンでもない。罪人はそのような立場で歩んでいたのです。罪人であつた私たちはそのことすら理解していなかったかもしれません。そのような状態であつた私たちが、和解の働きによって神の子とされたということが言えます。

・**心において敵** : ローマ8:7「**というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。**」、ローマ5:10「もし敵であつた私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」、私たちの思いは神のことを考えるよりも、自分のしたいこと、自分の楽しいことをする、それが私たちが心において神に敵対しているという状況だつたのです。その私たちの心が変わられて、御子の死によって神と和解させられるということを教えています。

・**悪い行い** : 「エルゴン」ということばがあります。これは「職業として従事する」という意味で、習慣的にやり続けることを表します。私たちの思いは神のことを考えるよりも自分のやりたいことをする、自分が楽しいことをする、それが私たちが心において神に敵対しているという状況だつたのです。その私たちの心が変わられて御子の死によって神と和解させられるということを、この「和解」は教えています。私たちは無意識に神に憎まれることを習慣的にやり続けていたのです。もしかすると、今も私たちにはそのような罪が残っているかもしれません。そのようなことを神は私たちに対してこの御子との和解によって解決を与えようとしておられるのです。

・**肉のからだの死** : 神の怒りをなだめるためには苦しみが必要と解きましたが、ヘブル13:12に「**ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。**」とあります。偽教師たちが教えた天使による和解では、天使自身が神の聖さを理解しないだけでなく、肉体をもつ人間ではありませんから、血を流すこともできず、また、ここで言う人間としての苦しみも理解することができなかつたでしょう。そのような天使によってこの和解が媒介されることは到底無理であると、ここでももう一度見ることができます。

このように「和解の意味」について見てきましたが、私たちはそのことを意識して、聖化という働きを神が私たちのうちで為してくださると同時に、神の愛を日々どれ程行っているのでしょうか？肉のからだの死、イエスがなめられた十字架の苦しみを私たちが十分知って、むしろ、喜んでそれを理解することが必要ではないでしょうか？

3) 和解の目的 22節

次に「和解の目的」を見ていきます。22節を見ると「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」とあります。

・**今は** : 普通、「今は」に続くことばは現在のことになりますが、ここでは不定過去のことばが続きます。

・**和解させてくださいました** : 実際のこの表現は不定過去という時制で、すでに事実となつた事柄が述べられています。和解の事実です。すなわち、ここでパウロが言うことは、「今の私たちを見てください。和解させてくださった過去の救いの結果、このような者として立たせていただいています。」ということで、パウロはまず、そのことを明らかにしようとしていると私たちは明確に読み取ることが出来ます。では、その「和解の目的」とはどういうことだつたのでしょうか？ここには三つの事柄が書かれています。私たちが神と和解することによってどのような変化がもたらされるのか？ということなのです。

和解の目的

・**聖くなるため** : これはもう明らかです。私たちが罪を離れて聖い者として歩いていくことです。
・**傷のない者となるため** : ヘブル9:14には「**まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におさげになつたその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするのでしよう。**」とあります。これはいけにえに関することを言っています。同じように、

民数記 28 : 3、9、11に「:3 …一歳の傷のない雄の子羊を」「:9 安息日には、一歳の傷のない雄の子羊二頭と、」「:11…一歳の傷のない雄の子羊七頭を」と書かれています。「傷のない」ということばは一つのヘブライ語で「タミム」、ギリシャ語では「アモモス」です。すなわち、私たちがいけにえの羊のように傷のない状態になることを神は望んでおられるということが分かります。なぜなら、I ペテロ 1 : 19にこのように書かれているからです。「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」と。血によって贖われた私たちが、キリストに似た傷のない者になるということが神のみこころであるということです。

・非難されるところがない : I テモテ 6 : 14には「私たちの主イエス・キリストの現れの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。」とあります。「非難されるところのない者となる」ということも、私たちがクリスチャンとして目指すべき、そしてまた、神の助けによって成ることができる三つ目の性質ということになります。I テモテ 3章では、執事の資格というところで「3:10 まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点が無ければ、執事の職につかせなさい。」とあり、同じように、クリスチャンがそのような者になることが神のみこころだということです。

・立たせてくださる : これは「そのような変化をもたらしてくれるのは神である」ということです。私たちが自分の力でそのように変わっていくことはできません。神がその力を与えてくださる。そして、そのような変化を実際に私たちのうちに起こして、その姿を神にお見せするのです。英語では「プレゼンテーション」ということで、何かのことを発表して聞いている人に理解してもらう、そのようなことで、私たちが自分の中に起こった聖化の変化を神にお見せするというニュアンスで、ここで「立たせてくださる」ということばを使っているのです。

以上見て来たことが「和解の目的」ですが、次に移りましょう。

4) 和解の証拠 23節

23節「ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」、ここを読んで、どうしてここを「和解の証拠」とまとめたのかと疑問をもたれるかもしれませんが、実は、この文頭の接続詞「ただし、」ということばは、ギリシャ語や英語では「もし、if」が使われています。ですから、この文の構成はこうになります。「もし、あなたがたが信仰に踏みとどまるのであれば…」と、その後「あなたがたは、しっかりとした土台の上に…」と次の三つの事柄が続くのです。「もし、あなたがたが神によって信仰に踏みとどまらせていただくなら、次の三つのことが伴うでしょう」と言っているのです。その三つのこととは？

・しっかりとした土台の上に : これは一つの副詞で「土台の上に」です。

・堅く立って : 「～にとどまる、保持する」ということです。

・福音の望み : クリスチャンの聖化、御国の相続、キリストとともに統治などです。

⇒外れることなく、信仰に踏みとどまることだと言います。

1 : 27を見ると「神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」とあります。すなわち、私たちがキリストに似た者に変えられることができる、そして、その結果、私たちは御国を相続し、そして、その御国を治めるものとなるという、このようなすばらしい約束を異邦人の中にあって私たちが証すること、それが神のみこころであると、そのことをこの27節は教えています。

ですから、この23節では、もし、私たちが本当に信仰をもっていると言うなら、しっかりとした土台の上に、福音を曲げることなく、いろいろな間違っただけの教えに惑わされることなく堅く立って、そこにとどまり続けるはずでしょう。そしてまた、福音の望みである「私たちの聖化や御国の相続やキリストとともに統治」を常に希望として私たちの中に忘れることなくもって、日々の生活を歩むはずでしょうと、そのように教えているのです。

いろいろな教えで「このようにするともっと楽しいよ」とか「こういうふうにしたらもっと信仰が成長した実感があるよ」「こういうふうになると喜ばしいよ」と、様々なことを聞くかもしれませんが、でも、私たちがとどまるべきところは、最初に聞いた福音です。御子イエス・キリストはどのようなお方であり、私たちにどのような約束をしてくださっているのか？そのことをもう一度私たちが復習して、そこにとどまって、そのことだけを喜び、御子自身を誇る、そのような信仰でなければならないということです。

それからもう一つ、23節に「この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられている」というところがありますが、私たちは果たしてこの福音をゆだねられた大きな責任がある者として生きている

のかどうか？そのことも吟味する必要があります。最後に「このパウロはそれに仕える者となったのです。」と書かれていて、この後24節から、パウロは自分の召命、自分が神に仕えることについて話を展開していくに当たって、自分がこの福音に対してどのような態度を取っているのかということを書いているのですが、同じように、私たちもパウロと同じ福音をゆだねられていることに間違いはありません。その福音に対して私たちがどのような態度を取るのか？福音を恥とするのか？それともそれを喜んで人々に伝えて行くのか？証をするのか？そのことが神から問われているのではないのでしょうか？
この一週間もそのことを覚えて過ごしたいものです。

《適用》 あなたの救いはどんなものですか？

1. 御子に対する信仰によって、生活が変えられていますか？
2. 御子よる和解によって、平安を得ていますか？
3. 御子を知ることにより、この方を喜び、誇っていますか？
4. 御子の福音をゆだねられている者として生きていますか？